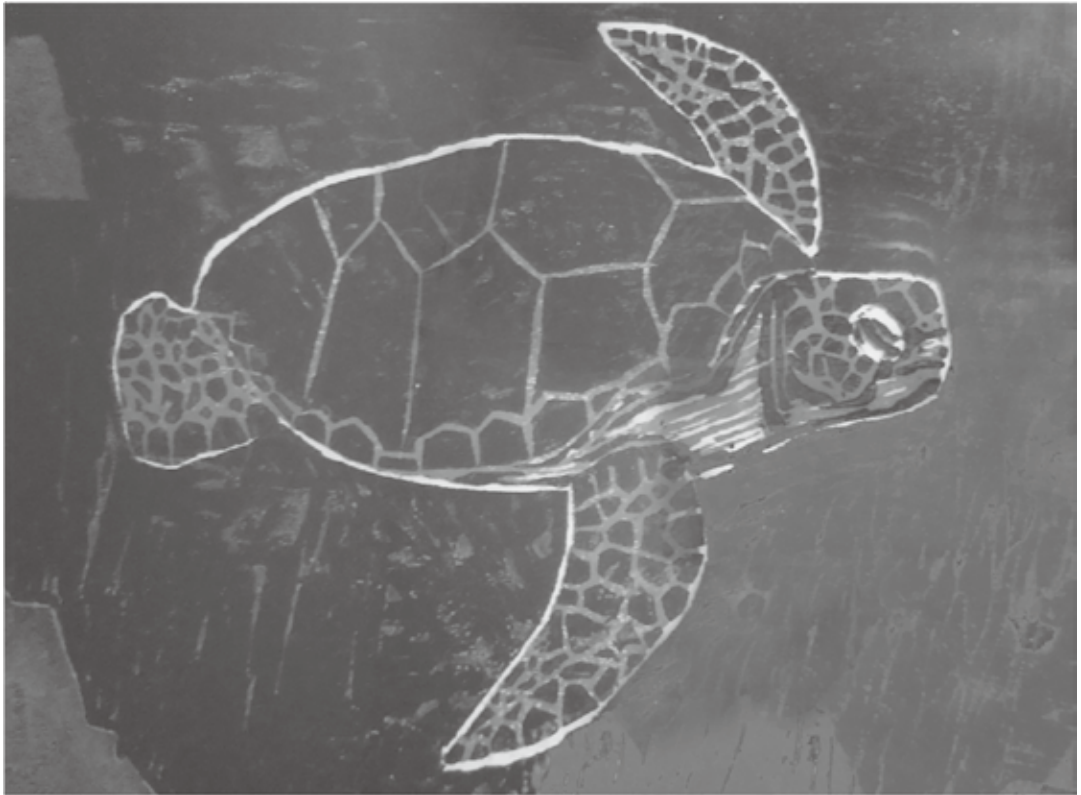




# Marine Turtler

マリンタートル

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌  
第29号





表紙の絵

## 松本 菜奈美様

今号の表紙は STS 会員の松本憲二郎様のご長女 菜奈美さんが、小学6年生の時に作成した版画のウミガメです。松本家では夏のお祭りで買ったアカミガメを亀太郎と名づけて飼っており、菜奈美さんが可愛がっているようですが、最近はカメよりもインコに興味に移っているようで、松本様は気を揉んでいるとのことでした。



### 表紙の絵を募集しています！

皆様から表紙の絵を大募集しています!!可愛いイラスト、リアルなウミガメ、ウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなものでも構いません。ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方はぜひ一度描いてみてください。皆様からの素敵な絵をお待ちしております。

- サイズ B5
- 色 自由(仕上がりはモノクロになります)
- 期限 〆切はありませんが、次号の掲載をご希望の方はお早めをお願いします。
- 応募方法 大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい
- 送付先 〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302  
日本ウミガメ協議会 マリントートル編集部  
メール info@umigame.org  
(件名に「マリントートル表紙」と明記の上お送り下さい)

会報の名称マリン・タートル(Marine Turtler)は、英和辞書には載っていません。つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし、米国では、最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きな人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリン・タートルと呼ぶことを提唱したいと思います。

○  
○  
**Marine  
Turtler**

# Contents

ウミガメ基礎講座 29	海洋ゴミとウミガメ(岡本慶)	3
ウミガメ研究最前線 1	イノシシによるウミガメ卵の捕食について(亀田和成)	5
水族館とウミガメ	アクアワールド茨城県大洗水族館(徳永幸太郎)	7
各地のマリンタートル紹介	沖永良部ウミガメネットワーク(山下芳也)	9
もしもし亀屋さん♪亀屋さんよー♪	嘉陽宗幸さんを訪ねて(若月元樹)	11
砂浜紹介	知多半島の砂浜を歩いて(松宮賢佑)	12
各地からの報告	黒島研究所(中西悠)	13
新人紹介	むろと廃校水族館(田平海奈 / 岩崎木綿子)	15
事務局からのお知らせ	第31回日本ウミガメ会議やんばる大会順延のお知らせ	16
	寄付付帯型商品のご案内	

# 海洋ゴミとウミガメ

岡本 慶

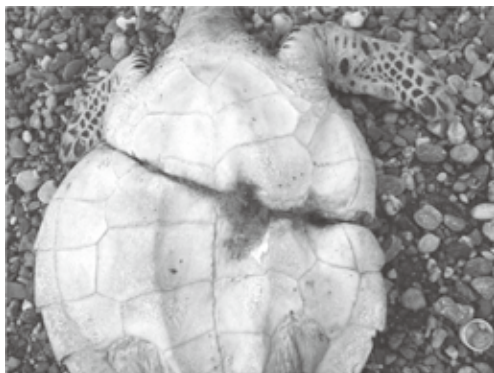
ヒトの世界では新型コロナウイルスが大流行し、世界中で感染が拡大するなど猛威を振っており、ニュースも新型コロナウイルス関連一色となっています。コロナウイルスが流行する前、ウミガメに関する話題として頻繁に取り上げられていたのは、マイクロプラスチック（5 mm 以下の微細なプラスチック）などの誤飲をはじめとしたゴミの影響を受けているというものでした。過去からプラスチックがウミガメに与える影響については、たびたび問題視されてきました。そうした議論が再燃する一つの大きなきっかけとなったのは、ヒメウミガメの鼻に入り込んだストローが抜けなくなったという痛々しい映像が様々なメディアによって流されたことだったように思います。幸いこの個体のストローは無事摘出されました。しかし、その他にもマイクロプラスチックやポリ袋などの誤飲、ゴーストフィッシングと呼ばれる漂流した網などの漁具への絡まりなど、ウミガメはヒトによるゴミの影響を様々な形で受けているのです。

まず誤飲については、透明でかつ柔らかいプラスチックを食べてしまっていることが多いことが報告されています。これはプラスチックをクラゲをはじめとした餌だと思い、食べた可能性が高いと思われます。日本近海のアカウミガメとアオウミガメでは、アオウミガメの方が人工的なゴミを食べていた割合が高かったことも報告されています。

次にゴーストフィッシングについては、まき網などの漁業によって何らかの理由で流出した網が、漂流しているうちにウミガメなどの生き物に絡まってしまうというものです。表層付近を漂い、ウミガメが呼吸できる状況であれば生きていたとしてもありますが、網が自重などで沈んでいる場所に絡まってしまうと溺死することもあるのです。



ゴーストフィッシングによって死亡したタイマイ



ロープが巻き付いて体に食い込んでいるタイマイ

このように、ウミガメは様々な海洋ゴミによる影響を受けていますが、世間に広く知らされてきた情報が必ずしも正しいものばかりとは限りません。だいぶ前の話になりますが、ウミガメがポリ袋を食べることによって窒息死し、海岸に打ちあがるという内容の広告がありました。ゴミのポイ捨てを減らそうという意図からのものでしたが、本当に死因がポリ袋などのプラスチックだったのでしょうか。死んで海岸に打ちあがったウミガメの多くから、消化管内にプラスチックが見つかるということは事実です。そして実際に大きなプラスチックや、大量のプラスチックを飲み込むことにより、それらが胃や腸に詰まり、餌を消化できなくなって餓死してしまうということはごく少数ながら起きています。しかし、小さいプラスチック片を飲み込んだだけで死んでしまうような生き物でないこともまた確かなのです。もちろん、死なないからゴミを食べても大丈夫ということでもなければ、ゴミを投棄しても良いということでもありません。しかし、事実と異なる内容に基づいてゴミを投棄しないことを訴えるためのシンボリックな存在として利用することも、良いことではないと思うのです。ゴミとウミガメの死亡における直接的な影響を明らかにすることは、決して容易なことではありません。それでも少しずつ情報を集め、その影響を少しでも軽減するような対策を取っていく必要があると思います。



口から釣り糸が伸び、左前肢の付け根に絡まった状態で見つかったアオウミガメ  
外科的な処置後、放流された

さて、新型コロナウイルスに話を戻すと、毎日飼い犬の散歩をしながらゴミ拾いをしている私の知人によれば、コロナウイルスが流行し始めてからマスクのゴミを拾うことが増えたようです。ゴミとしての影響だけでなく、感染の拡大を招く恐れもあり、非常に気分の悪いゴミと言えます。コロナウイルスは日本をはじめ東アジア諸国ではやや落ち着きつつありますが、欧米諸国ではいまだ収束には程遠い状況となっています。今後マスクのみならず、コロナウイルスに関わるゴミが海へと流出し、ウミガメに影響を及ぼすことがないように祈るばかりです。

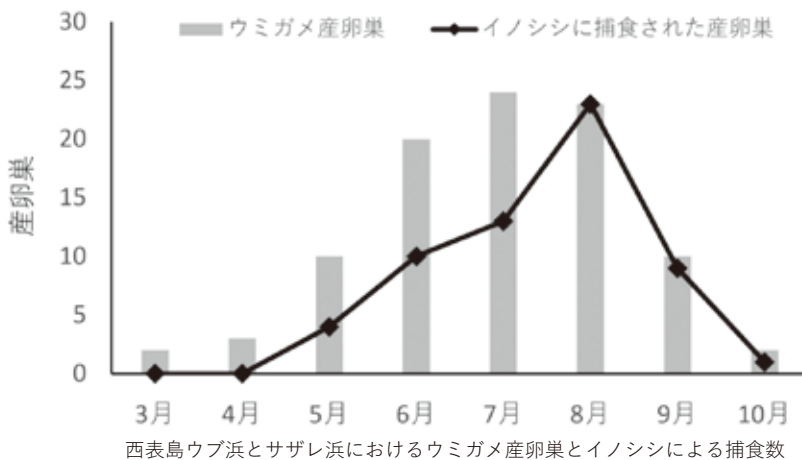
## イノシシによるウミガメ卵の捕食について

黒島研究所 亀田 和成

西表島南岸にあるウブ浜とサザレ浜は、日本でも有数のアオウミガメの産卵地として知られている。それぞれの浜は 350 m と 600 m という小さな砂浜であるが、産卵シーズンになれば 10 m 置きにウミガメの上陸痕跡があるような、きわめて産卵密度の高い浜である。私たち黒島研究所は、1980 年代からこの地域のウミガメ産卵状況をモニタリングしている。

2008 年に産卵巣が掘り返され、ウミガメ卵が何者かに食べられていることを確認した。翌年、私たちの研究所に琉球大学から伊澤雅子先生と戸田守先生がヤモリのサンプリングで訪れた。琉球列島において、哺乳類と両性爬虫類を現場主義で研究されている方である。調査の合間に「ウミガメ産卵巣が掘り返されて食べられている。砂浜に残された足跡からイノシシだろう。」と話したら、すぐに調べるようになった。今ではイノシシがウミガメ卵を食べることは知られているが、当時は情報が少なく、本当にイノシシなのか？という懐疑的な状況からのスタートであった。

この研究は、伊澤先生の研究室にいた笹井隆秀氏の卒業研究として進めた。琉球大学にて研究計画が練られ、目視による観察と自動撮影装置を設置することになった。ウブ浜とサザレ浜には陸路が無いので、船を沖に停泊して泳いで上陸する。カメラ機材は濡らせないので厚手のビニール袋に入れ、さらに発砲スチロール箱に入れてガムテープで留め、それを抱えながら上陸した。荷物が多いので、何度も船と砂浜の間を往復した。キャンプ生活になるのだが、強風でタープテントが立てられない。日中は岩陰にできるわずかな日陰に、皆が集まって仮眠をとった。そのような中で、何とかイノシシが産卵巣を掘り返す写真が撮れた。これで犯人は確定である。次に、イノシシによるウミガメ卵への捕食圧を月ごとに調べることにした。その結果が下のグラフである。注目すべきは 8 月に急に捕食圧が増加したことである。実は、調査した年は 8 月に大きな台風が八重山諸島を通過した。イノシシによる捕食圧が上がったのは、その直後であった。イノシシを個体識別していないので、はっきりとは言えないが、新たにウミガメ卵を食べ始めた個体が出現したためと考えられた。





ここからは私の想像である。2008 年からイノシシがウミガメ卵を食べ始めた原因として、2006 年の台風 13 号と 2007 年の台風 15 号の影響がある。この 2 つの台風は猛烈な勢力で八重山諸島を直撃し、大変な被害をもたらした。台風の通過後は樹木が倒れ、塩害によって葉が枯れ、西表島の山々が茶色くなった。西表島に住むイノシシの主要な餌は、ドングリなどの木の実はである。これらの台風によってイノシシ達の食べ物は激減したと思われる。一方で、ウブ浜とサザレ浜のアオウミガメの産卵回数は、2000 年から増加傾向にあった。台風で餌が減り、空腹となったイノシシがウミガメ卵を食べはじめたのは、必然だったのかもしれない。イノシシは学習能力が高く、一度覚えたらその後も同じ食べ物を利用する。ウミガメ卵を食べる習慣は、その子ども達にも引き継がれ、やがて恒常化されていく…。イノシシの社会にもこんな食文化の変化があったのではないだろうか。



多くの写真に親子のイノシシが映っていた  
手前に写る白いものはウミガメ卵の殻

残念ながら、当時のドングリの量やイノシシの家系図がないので、私の想像は論文にできない。科学論文は証拠の上に積み上げられるためである。研究者は現実的な話ばかりしていると思われるがちであるが、実際は想像ばかりしている。宴会での与太話から新しいテーマが見つかることもある。少なくとも、この研究は 2009 年に琉球大のメンバーと私たちが語っていなければ成し得なかった仕事である。

参考資料：

笹井隆秀・亀田和成・伊澤雅子（2016）西表島南海岸におけるリュウキュウイノシシ *Sus scrofa riukiuanus* によるウミガメ卵捕食と砂浜利用の季節的变化．哺乳類科学 56（2）：97-103

亀田和成・若月元樹，他 9 名（2017）西表島ウブ浜とサザレ浜におけるアオウミガメの上陸状況とその脅威について．うみがめニュースレター 105: 13-20

### アクアワールド茨城県大洗水族館のウミガメ類産卵・漂着調査

アクアワールド茨城県大洗水族館 徳永 幸太郎

アクアワールド茨城県大洗水族館では、これまでにアカウミガメ、アオウミガメ、クロウミガメ、タイマイのウミガメ類飼育実績があります。当館最大の水槽(1300 t)で行っている対話型水中解説ショー「アクアウォッチング」でのウミガメに関するリクエスト率は高く、人気の高い展示生物です。また、飼育・展示以外では茨城県沿岸におけるウミガメ類の生態を把握することを目的に、ストランディング及び上陸産卵を中心とした調査も行っています。

関東北部に位置する茨城県の海岸は太平洋に面し、その総延長は約 190 km と南北に長く、水族館はそのちょうど中間に位置しています。茨城県沿岸の海岸環境は南北で大きく異なります。福島県境から当館のある大洗町までの北部の海岸は、海食崖に挟まれた砂浜が点在するなど変化に富んだ海岸地形である一方、千葉県境である利根川河口までの南部には、約 100 km の延長を持つ長大な砂浜が広がっています。



北部の海岸



南部の海岸



本県沿岸ではアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、オサガメの 4 種の来遊が確認されています。特にアカウミガメは太平洋における産卵北限域に当たり、国内の主要な産卵地と比較するとその上陸件数は著しく少ないものの、稀に産卵・孵化が確認され、北限域としての産卵状況の推移を把握する上で、情報の蓄積は重要であると思われます。上陸産卵に関しては、一般の方や市町村からの情報提供を受けて現場確認を行い、産卵があった場合には状況に応じて移植を行っています。



アカウミガメの上陸産卵は過去 9 年間で 11 件あり、2016 年には自然孵化が 1 件確認されました。南部の海岸での上陸産卵が多く、北部の海岸での産卵はこれまでに 1 件に留まっています。

ストランディングについても外部連絡を受けて現場に向かい、種判別、各部位の計測後に解剖して消化管内容物等を確認しています。生存している場合は一時的に保護し、標識を付けて放流しています。過去 9 年間でストランディングが確認された種は、アカウミガメ 47 個体 (57.3%)、アオウミガメ 24 個体 (29.3%)、オサガメ 3 個体 (3.7%)、タイマイ 2 個体 (2.4%)、種不明 6 個体 (7.3%) で、アカウミガメ、アオウミガメが大半を占めており、海水浴場などでの発見率が高まる夏季に多い傾向がありました。これらの調査は一般の方からの連絡に頼るところが多いため、広範囲の情報収集が可能となる一方、データの定量性に欠けるなどの課題もあります。しかし、可能な範囲で活動を続けて、茨城県沿岸のウミガメ事情を少しでも明らかにできればと考えています。

### 沖永良部ウミガメネットワーク

山下 芳也

2006年に16名のメンバーで活動をスタートした沖永良部ウミガメネットワークは、徐々にメンバーも増え、活動の幅を広げています。活動理念は島の子供たちに沖永良部の豊かな自然を体験してもらい、環境教育を行うことです。発足から現在に至るまでボランティアグループとして活動しているため、予算は0。予算がなくてもできる上陸産卵調査と観察会を行っています。

観察会を行う砂浜はリーフに囲まれているため、ウミガメは満潮時にしか上陸できません。そのため、2週間に1度ある20時の満潮時のみ開催しています。参加費は無料です。産卵観察会と子ガメ観察会は年に各5回、計10回開催しています。

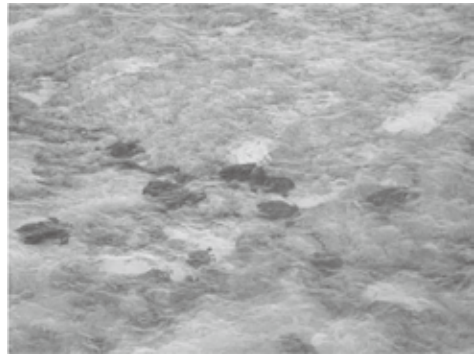


南西諸島の中心にある沖永良部島では、上陸するアカウミガメとアオウミガメの割合が約半々です。産卵シーズンはアカウミガメが5-6月で、アオウミガメが6月下旬から7-8月となり、調査は4月末から9月上旬までと長期間になります。活動初期から10年間は1シーズン平均400回の上陸がありましたが、近年は平均200回と減少しています。





ウミガメビューポイント



海藻を食む姿を見ることが出来る

2011年には日本ウミガメ会議沖永良部大会を開催しました。ウミガメ会議開催は全国に沖永良部島のウミガメポテンシャルをPRするためでした。また、会議開催前には和泊町にウミガメビューポイントが整備され、リーフで海藻を食むアオウミガメを見ることができるようになりました。時には一度に30頭ほどのウミガメを見ることが出来る貴重な場所で、島の観光資源となっています。

昨年は近畿大学、東京海洋大学、京都大学より8名の学生が来島し、卒論や修論、ウミガメ会議での発表などを行っています。そのことが島のウミガメの価値を高め、島のPRにも繋がっています。

ウミガメ調査から始まったグループですが、今では活動が進化して多方面の自然関連活動を行っています。沖永良部島野鳥愛好会、スタークラブ（星空観察会）、生き物＆野鳥愛好会、いきものがかり沖永良部島、石垣愛好会、沖永良部島植物愛好会などがあり、島の貴重なデータの蓄積を行っています。情報は全てホームページやSNSなどで公開しています。



2020年は4月26日にアオウミガメの初産卵がありました。初めてアオウミガメが4月に産卵しました。どんな年になるのか楽しみです。これからもボランティアグループとして、島の子供たちを育てる為という理念からぶれることなく、活動を継続していきたいと思います。

## 嘉陽 宗幸さんを訪ねて

むろと廃校水族館 若月 元樹



今年6月に67歳になった嘉陽宗幸さんはウミガメ調査歴19年目。「やんばる」と呼ばれる沖縄本島北部の国頭村で20か所近く、砂浜の産卵調査をしています。砂浜の近くに米軍関係の施設もあることから、産卵巣には日本語と英語で表記したタグをつけています。国内屈指の広大なフィールドをこなす亀屋のひとりです。

嘉陽さんは国頭村役場に勤務していました。窓口で「ウミガメご担当の方いらっしゃいますか」と聞くと、嘉陽さんに取り次いでもらえました。各地でウミガメの産卵に魅せられて他所から移り住んで来た人が、その自然が当たり前である地域住民との温度差に悩むことは多くあります。嘉陽さんのように地元出身で、ウミガメ調査に熱心な方は貴重です。また、役場勤務ということもあり、国頭村のウミガメ情報は嘉陽さんに集約されます。かつて村内の漁港にウミガメが居ついていると教えてもらい、ふらっと見に行ったところ、クロウミガメだったために大騒ぎになったということもありました。

偶然、飛行機と一緒にあったことがあります。那覇空港から南大東島へ行くプロペラ機です。乗る前からプロペラ機を嫌がっており心配しましたが、いざ飛び立つと、窓に顔面を張り付け、上空からクジラを探すことに没頭していました。嘉陽さんはウミガメのオフシーズンは海を眺めてクジラを探しています。年中忙しい人なのです。



沖縄の初産卵の情報は、ほぼ嘉陽さんから届きます。2013年にはもっとも多い約600回の産卵を確認されました。八重山諸島では産卵種がアカウミガメからアオウミガメにほぼ替わりましたが、嘉陽さん自身が現在、国頭村でアカとアオの産卵比9:1から6:4にまで変化している状況を目の当たりにしています。

「後ろがない」と、他の地域同様に後継者がいないことを悩んでいらっしゃいます。しかし、初産卵や産卵シーズン終了の度に、嘉陽さんから聞かされる自慢話は聞いていて心地良く、まだしばらくはご本人から直接聞いていたいものです。

## 知多半島の砂浜を歩いて

事務局 松宮 賢佑

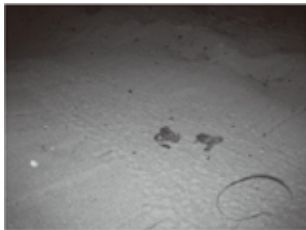
今からおよそ 10 年前、愛知県知多半島の奥田海岸で、私は砂浜パトロールデビューをしました。ウミガメ協議会入局前に南知多ビーチランドで勤務していた時です。今回は私のウミガメ歴が始まった場所である、知多半島の砂浜をご紹介します。

知多半島では南知多ビーチランドが 1981 年からウミガメ調査を行っており、これまでに当会の前会長でもある亀崎直樹さんや元理事の黒柳賢治さんが携わってきました。現在は伊藤幸太郎さんが後を引き継いでいらっします。また、知多半島先端の師崎港から高速船で 10 分のところにある篠島では、2012 年に地元の小学生が発起人となって結成した『篠島ウミガメ隊』が砂浜清掃やパトロールを行っています。知多半島には篠島をはじめ、各地域で学校や市民が清掃活動をしなが、ウミガメがやってくる砂浜を見守っています。



奥田海岸

愛知県西部、伊勢湾と三河湾に挟まれた内湾に位置する知多半島には、1km ほどの砂浜が点在しており、毎年ウミガメの産卵が確認されています。近隣の島々でも数年に一度、産卵があります。点在する知多半島の砂浜は、奥行 10 ~ 20m ほどのところが多く、近くには道路が走っているため、上陸産卵情報のほとんどが近隣住民や観光客からの通報です。ウミガメ情報をいただいた際には、南知多ビーチランドが出動し、調査や保護を行っています。



2010 年奥田海岸生まれの子ガメ

水族館に隣接している奥田海岸は、知多半島で最も産卵頻度が高く、地元の方の関心も高い海岸です。ウミガメシーズンには水族館スタッフだけでなく、地元の方々もウミガメの訪れを気にかけているため、上陸があればすぐに発見されます。奥田海岸は、私が勤務していた 2010 年にも産卵があり、子ガメの脱出を見届けた場所です。孵化予定日の数日前から毎晩、数時間おきに産卵巣の様子を見に行き、初めて野生の子ガメを見たときの感動は今でも覚えています。今思えばそれが、私がウミガメにはまった瞬間でした。



若松海岸

奥田海岸の隣にある若松海岸は、1981 年に世界で 2 例目となった、雑種の孵化が確認された海岸です。知多半島には、およそ 30 年におよぶウミガメ調査・研究の歴史があり、現在もその伝統が引き継がれています。



# 運ぶだけでもたいへん

黒島研究所 中西 悠

黒島研究所ではウミガメをはじめとしたヤシガニ・ハブ・魚などの黒島に生息する生き物を飼育・展示しています。飼っている生き物は色々な方法でやってきます。たとえばウミガメなら、前号のお話でも紹介されていた海人三郎（うみんちゅサブロー）のような石垣島の漁師さんをお願いして捕獲していただき、黒島の漁師さんの網に間違っかかってしまったカメが運ばれてきたりします。

研究所の水槽まで運ぶ作業は大変です。黒島研究所は大きな施設ではないので、水槽を積んだトラックもなければクレーンもありません。あるのは軽トラとおのれの体だけです。

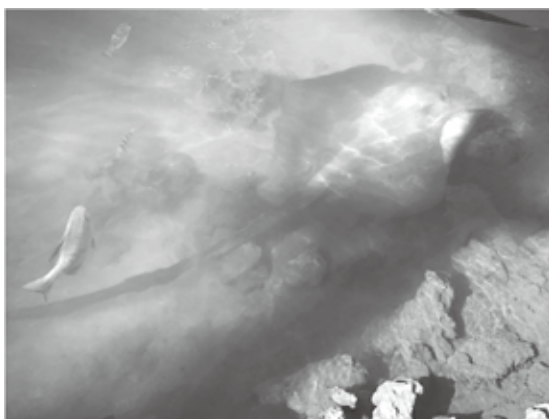
調査研究目的で捕獲していただいたウミガメの場合は、港で受け取ります。小さいと甲長 30～40 cm のものから、大きくなると甲長 100 cm になるものまで様々です。これらを人の力で軽トラの荷台に積んで運びます。小さいカメだと一人でもひょいと持てる重さですが、大きいカメは 100 kg を超える場合もあります。人数が多ければ運びやすいというわけでもなく、持ち方にもコツが必要です。もちろん気合も必要です。研究所に到着してからも、体重や甲羅の計測と標識タグ付けが待っています。こちらも大きなウミガメになると、一人では抑えられないほどの腕の力です。カメが落ち着いている隙をついて、作業を終わらせます。大きなウミガメが多いと、腕や腰が痛くなりますが、調査後は運びきった達成感と疲労でビールがいつも以上においしく感じます。



カメの計測風景、このカメはおとなしい



ウミガメの場合、肺呼吸ですので運搬は大変であるものの作業時間は余裕を持てます。網にエイがかかり、漁師さんから連絡を受けた時はひどい目にあいました。エイといっても大きさが 1.5 m ほどのツカエイで、しかもかかった場所が運搬用の軽トラから歩いて 10 ~ 20 分かかる場所でした。上司が、持ってきた大きなバケツに入ると判断し、軽トラまで取りに走りました。いざ入れようとすると、バケツよりエイのほうが大きく、上司も「判断ミスだ。」と嘆きつつも、エラをしっかりと水につけて、なんとか無傷で元気に運ぶことに成功しました。大きなウミガメでも味わったことがないほどの運搬作業に、腕がもげそうになりました。大変だったにも関わらず、運搬作業を手伝った研修生も「貴重な経験ができた。」と喜んでくれました。



研究所で泳ぐツカエイ

島で変わったものや珍しい発見があると連絡をいただけますが、それは生物に限りません。変わり種としては、これまでに種子島で打ち上げられた日本の H2 A ロケットの、フェアリングと呼ばれる先端部分の破片なんてものもありました。しかも2度も。こちらはウミガメやエイに比べて、大きい割に軽く、日本の先端技術の一端を垣間見ることができました。破片の裂けた部分から見える金属部分は、ウミガメの甲羅の鱗板（りんぱん）のようにハニカム構造になっています。また、発信機を甲羅に付けて追跡する調査もたまに行いますので、ロケットの破片が漂着したり、それを展示することに対しては感慨深いものがあります。島の発見を収集し続ける黒島研究所。旅行や研修で来られる日を心待ちにしております。

## むろと廃校水族館 田平 海奈

将来の夢は生き物に関わる仕事に就くことでした。両親に連れられ、よく釣りに行っていたことが大きかったのだと思います。大学は魚の生態学研究室がある高知大学に進学しました。

学生の時に行った関西の大型水族館での研修は、期待していたほど楽しくはなく、水族館は自分に向いていないと感じました。しかし、一般企業でやりたいことも特になく、大学院に進学しました。同時期に室戸でオープンした「むろと廃校水族館」が日本ウミガメ協議会の室戸調査基地が運営することを知り、そんなところに水族館ができて大丈夫なのか…?と心配しつつ、興味が湧き、夏に研修に行きました。普通的水族館ではできない経験と室戸の素晴らしさを学ぶことができました。廃れていきつつあるものを、すくいあげる廃校水族館は教育施設としてもあるべき姿であり、課題先進県と呼ばれる高知県にふさわしいと感銘を受けました。

その後、求人募集に応募しました。地元兵庫の友人達からは、田舎になんて絶対住めない、ありえない、なんで帰ってこないの?と言われます。しかし、高知に来て7年、たまに兵庫へ帰省すると人の多さに疲れてしまいます。自然が多く残る地域に産卵しにくる、ウミガメの調査の方が私には向いているのかもしれない。



## むろと廃校水族館 岩崎 木綿子

大阪発の高速バスに揺られ、海岸沿いのグネグネ道を進みながら、カーブに差しかかるたびに「これを超えたら水族館が見えてくるかも」と期待しましたが、何十回と裏切られました。ようやく「むろと廃校水族館」にたどり着きましたが、バスから降りると背後には山が迫り、目の前は太平洋、到着一番の感想は「大変なところに来てしまった!!」でした。

旅が好きで、博物館も巡っていました。そのうちに「わからないもの」を「今の私たちにはわからないもの」と位置づけて未来へ送る、博物館という場を面白く感じ、またホンモノの資料が持つ力にも魅せられ、「博物館で働きたい」と考えるようになりました。面白い館はないかな?とあれこれ考えていたところ、ウミガメ協議会の運営するむろと廃校水族館を知りました。

室戸での仕事が始まって間もなく、ウミガメの産卵シーズンが訪れました。夜な夜な近所の砂浜を歩きます。浜歩きを途中で切り上げた翌朝に浜で上陸産卵跡が確認され、ウミガメが近くて遠い（遠くて近い?）存在であることを思い知りました。

ウミガメ調査に協力してくださる漁師さん、かつてウミガメを調理した話を教えてくれた地元飲食店の女将さん、研究で室戸へ来る学生さんや大学の先生方…などなど、様々な方とお話し、それぞれの視点に驚く日々が続いています。

展示用の生き物、初めて参加するお祭り、初めて見る漁具、初めて聞く方言、初めて味わう料理（室戸に来て体重が10キロ増えました）。新しい世界、面白いことが尽きない毎日に「やっぱり大変なところに来てしまった」と改めて思います。このような環境で働ける喜びをかみしめながら、ウミガメや室戸のことを知ろうとする方々の力になれたらと思っています。



# 第31回日本ウミガメ会議 やんばる大会 順延のお知らせ

新型コロナウイルス感染症が拡大している状況を鑑み、令和2年12月18日～12月20日に開催を予定しておりましたが、第31回日本ウミガメ会議やんばる大会を順延することに致しました。日程につきましては、時期を再考の上、改めまして皆様へご案内する次第です。参加をご検討いただいていた皆様にはご迷惑をおかけすることとなり、大変申し訳ございません。何とぞご理解のほど、よろしくお願い致します。

なお、今年度のウミガメ上陸・産卵の状況等の取りまとめにつきましては、冊子の発行を検討しております。調査者の皆様には、アンケート等でご協力いただきたく存じます。お力添えのほど、よろしくお願い致します。

## 寄付付帯型商品のご案内

下記の商品をご購入いただくと、売り上げの一部が当会へと寄付されます。いただいたご寄付は、漂着個体の保護や調査研究など、ウミガメの保護・調査にかかる費用に充てられます。皆様のご支援をどうぞよろしくお願い致します。(※ご購入は各企業様のネットショップ等からお願い致します。)



### ホヌ型リボンマグネット

ニチレイマグネット株式会社様

購入方法：ネットショップ

(URL <https://store.ribbonmagnet.jp/>)

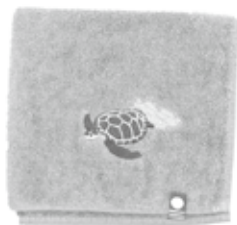


### ウミガメキーホルダー

アトリエ CANOE 様

購入方法：ネットショップ

(URL <https://canoe-aomori.com>)



### 地域の自然を守るタオル (ウミガメキタオルハンカチ)

ECO ひいきプロジェクト (太平電機) 様

購入方法：ふるさと納税、ネットショップ

・ふるさと納税「さとふる」(URL <https://www.satofull.jp/>)

・ふるさと納税「ふるさとチョイス」(URL <https://www.satofull.jp/>)

・がじゅ Marine (URL <http://www.gajumarine.com/>)



## STSmembers募集中!

STS(SeaTurtleSupport) membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。日本ウミガメ協議会では、当会をサポートしてくださるSTSmembersを随時募集しております。皆様のお知り合いで自然が好きの方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、是非入会をお誘い下さい。

入会金:なし

年会費:個人会員3,000円、団体会員10,000円、特別会員100,000円

会員特典:オリジナル会員証&グッズのお届け

機関誌(MarineTurtler)のお届け

ウミガメ速報の配信



## ご寄付をいただいた方々

秋山秀子、シャディ(株)、山田輝一、Taylor & Francis Group 日本支社、石濱康絵、ヤフー(株)、三菱重工業(株)、ライオン(株)、ホテル日航アリビラ、コカ・コーラボトラーズジャパン(株) (道の駅 日和佐かめたろう)、阪口巧、三方泰子、片山素美、吉田一也、金井澄、小野悦子、長谷川久美子、串本海中公園、植村ひこ、橋爪優美子、細野広美、白木隆司、(株)はごろもマリンサービス、須之部友基、奥彩麻里、鍵谷理恵、池村茂、竹下淳也、マツイユウスケ、清水すみゑ、松波久雄(黒島診療所)、小林雅広、戸澤太郎、戸口典美、平田昭彦、福井県海浜自然センター、Eco ひいきプロジェクト(太平電機)

そして事務局、黒島研究所、みなべ基地、むろと廃校水族館に募金&差し入れをくださったみなさま

(ご寄付をいただいた順、敬称略)



## 編集後記

新型コロナウイルス感染の終息がなかなか見えませんね。今後、第2波がいつ来るのか、決して油断はできない状況です。当会でも運営を自粛しておりましたが、その間、自宅にある標本用大型フリーザーの整理をしました。中にはスタンディングで調査した後に、骨格標本作製用にと持ち帰った様々な生き物が眠っています。上層に入れておいた甲長40cmほどのアオウミガメと、体長120cmのスジイルカを分割した標本を取り出すと…下層からは自分でもすっかり存在を忘れていた、小さなヒメイトマキエイが出てきました。エイの骨取りは軟骨を傷つけないように気を遣うので、時間がかかります。しかし体の仕組みが良くわかり、とても面白いものです。むろと廃校水族館の新たな展示物としてお披露目できるよう、これからコツコツ作製したいと思います。

事務局 平井 紗綾



マリンタートル(日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2020年7月1日

発行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302

電話 072-864-0335 Fax 072-864-0535

URL <http://www.umigame.org> E-mail [info@umigame.org](mailto:info@umigame.org)